町 内 遺 跡 XⅢ

大福寺境内遺跡（第 4 次調査）

― 保存目的の範囲内容確認調査 ―

２０２０

埼玉県比企郡ときがわ町教育委員会

町 内 遺 跡 XⅢ

大福寺境内遺跡（第 4 次調査）

― 保存目的の範囲内容確認調査 ―

２０２０

埼玉県比企郡ときがわ町教育委員会

序

ときがわ町は平成１８年に旧玉川村と旧都幾川村が合併して誕生しました。町内には慈光寺が所有する国宝の法華経一品経や平成２０年に国指定史跡となった小倉城跡をはじめ、数多くの文化財があります。埋蔵文化財としては１００箇所以上の遺跡が分布しています。

この度、平成３０年度に実施した大福寺境内遺跡における保存目的の範囲内容確認調査の報告書を刊行することとなりました。大福寺境内遺跡は小倉城跡の正面麓に位置し、小倉城跡と何らかの関係があるものと推測されます。本書は、その関係性の解明および保存を図っていくことを目的とした確認調査で得られた成果を示した内容となります。

本書が、文化財保護や生涯学習資料として、また考古学、歴史学、郷土史研究等の基礎資料として広く御活用いただければ幸いに存じます。

最後に、調査から本書の刊行に至るまで、土地所有者はじめ地元関係各位、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課に多大なる御指導、御協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

平成３１年３月

ときがわ町教育委員会

教育長　久米正美

例　言

1．本書は、平成 30 年度に実施した大福寺境内遺跡（№41－076）における保存目的の範囲内用確認調査の報告書である。
2．大福寺境内遺跡は埼玉県比企郡ときがわ町大字田黒字小倉 608 外に所在する。
3．発掘調査は、ときがわ町教育委員会が主体となって実施した。
4．発掘調査期間は平成 30 年 12 月 18 日から平成 31 年 1 月 10 日までである。
5．発掘調査、整理作業は、石川安司と杉山拓馬で行い、本書の執筆、図面編集、表・図版作製は杉山拓馬が担当した。
6．遺構実測及び空中写真撮影は㈱中野技術に委託し実施した。
7．発掘調査及び整理作業、報告書刊行に要した経費は、文化庁国庫補助金、県費補助金、町負担金である。
8．本書に掲載した資料は、ときがわ町教育委員会が管理・保管している。
9．発掘調査から本書作成に至る間に諸機関から御指導、御教示、御協力を賜った。銘記して御礼申し上げる。（五十音順、敬称略）
埼玉県教育局市町村支援部文化資源課
10．発掘調査及び整理作業員
島田健一　須永髙二　山崎尚子　吉田亨　吉田望　渡邊隆

凡　例

1．本書で使用した地図は、ときがわ町発行の 1/2500 都市計画図を編集・調整したものである。
2．発掘調査における測量は世界測地系座標を使用した。
3．挿図における方位は全て図中に示した。
4．挿図における縮尺は図中の()内に示した。
5．遺構断面図に表記した標高は東京湾平均海面（T.P）を使用し、単位はmである。
6．遺物観察表の表記法は次のとおりである。
・口径・底径・器高の単位は cm である。
・（　）内の数値は推定値を示し、［　］内の数値は残存値を示す。
7．遺構断面図中のスクリーントーン（左下がり斜線）は地山を示す。
8．遺物実測図の表記方法で、須恵器については断面を黒く塗りつぶしている。
9．本書における遺物に付した番号は、遺物実測図のみ別に付している。

目　次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　調査に至る経緯……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境……1
　1　遺跡周辺の地理的環境……1
　2　ときがわ町の遺跡……3
　3　遺跡周辺の歴史的環境……3
Ⅲ　遺跡の概要……10
Ⅳ　調査の方法と成果……14
　1　調査の概要……14
　2　遺構と遺物……19
Ⅴ　発掘調査の成果……24
引用・参考文献……24

写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

第１図　埼玉県の地形図……2
第２図　ときがわ町遺跡分布地図……６・７
第３図　遺跡周辺の地形……12
第４図　既往の調査区位置図……13
第５図　調査区全体図……14
第６図　調査区平面図（１）……15
第７図　調査区平面図（２）……16
第８図　土層断面図……17
第９図　調査区遺物出土状況図……20
第 10 図　調査区出土遺物実測図（１）……21
第 11 図　調査区出土遺物実測図（２）……22

表 目 次

第１表　ときがわ町遺跡一覧表……8
第２表　第１号トレンチ土層観察表……18
第３表　第２号トレンチ土層観察表……18
第４表　第３号トレンチ土層観察表……18
第５表　第４号トレンチ土層観察表……18
第６表　調査区出土遺物一覧表……23

図 版 目 次

図版１　調査区遠景（東から）　調査区遠景（西から）
図版２　調査区全景
図版３　調査区出土遺物（１）
図版４　調査区出土遺物（２）
図版５　調査区出土遺物（３）
図版６　調査区出土遺物（４）

Ⅰ　発掘調査に至る経緯

当該遺跡は平成 22 年４月から実施された第１次調査により発見された遺跡である。平成 26 年４月には第２次調査が実施され、集石遺構が確認されている。平成 29 年１月に実施された第３次調査では、大福寺の参道にほぼ沿うかたちで石組み側溝が検出された。今次報告の第４次調査は、第３次調査の成果を踏まえて、検出された石組み側溝の全容解明の一端として調査の実施に至ったものである。そのため、文化財保護法第 99 条第１項の規定に基づき平成 30 年 12 月４日付とき教生第 193 号で「埋蔵文化財発掘の通知」を埼玉県教育委員会へ提出し、当該遺跡において第４次調査となる保存目的の範囲内容確認調査を平成 30 年 12 月 18 日に開始した。調査は平成 31 年１月 10 日の埋め戻しをもって完了し、平成 31 年２月８日に埋蔵物発見届を埼玉県小川警察署に提出し、平成 31 年２月８日付けで埋蔵文化財保管証を埼玉県教育委員会に提出した。そして埼玉県教育委員会より平成 31 年３月 22 日付け教文資第７－236 号で埋蔵物の文化財認定及び帰属についての通知があった。

調査組織

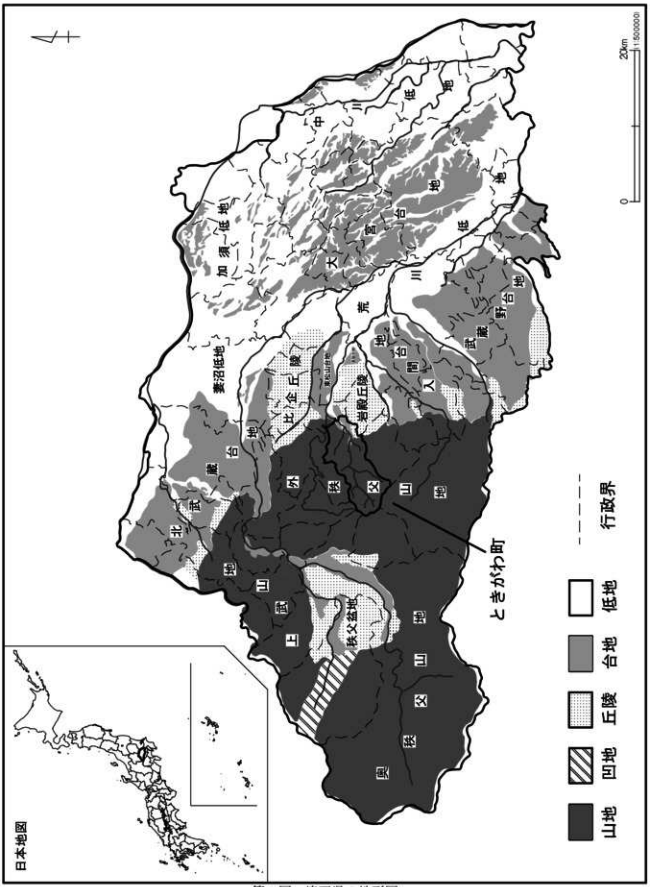
調査主体者	ときがわ町教育委員会生涯学習課	
事　務　局	教　育　長	久米正美
	生涯学習課長	石川安司
	生涯学習課主幹	正木彰
	生涯学習担当	森村恵美子
	生涯学習担当	杉山拓馬

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　遺跡周辺の地理的環境

ときがわ町は平成 18 年に旧玉川村と旧都幾川村が合併して誕生した。面積は 55.9㎢、人口は 11,000 人あまりである。埼玉県のほぼ中央に位置し、概略西に高く東に低い埼玉県の地勢をそのまま相似形に縮小したような地形である。東端の都幾川河床から西端の大野峠付近まで高低差 800ｍに及ぶ地形変化がみられる。町の大部分が外秩父山地に属しており、南東の一部に岩殿丘陵（南比企丘陵）の北西縁部がかかる。南北に走る JR 八高線をおおよその境に西に外秩父山地、東に丘陵と台地が形成されている。町の面積の七割が山林であり、最西端には標高 875.8ｍｍの堂平山をはじめ標高 700ｍ以上の山々が連なっている。この自然地形が分水嶺として町境となっている。町の中央を西から東へと荒川水系の都幾川が貫流し、北端から流れる支流の雀川と町内下流域で合流し、東の嵐山町へと流れる。また、町の北東端では、同じく都幾川の支流で東秩父村の堂平山を源とする槻川が小川町、嵐山町の３町境を蛇行して流れる。

本報告の大福寺境内遺跡はその蛇行して流れる槻川の右岸の段丘上で、仙元山から東に派生する支尾根の山裾に位置する。


日本地図
上武山地
秩父山地
秩父盆地
北武蔵台地
武蔵野台地
入間台地
荒川低地
中川低地
大宮台地
荒川扇状地
加須低地
妻沼低地
出丘陵
狭山丘陵
ときがわ町
0
20km
1:500000
山地
凹地
丘陵
台地
低地
行政界

第１図　埼玉県の地形図

2 ときがわ町の遺跡

ときがわ町の遺跡は、そのほとんどが町の東側の沖積低地や低山などに集中的に分布する。それらの遺跡は過去の遺跡分布調査によって確認されたものである。ときがわ町の遺跡分布調査は大きく2時期に分けられる。まず第1期は、昭和47年を中心にその前後1年のなかで埼玉県教育委員会及び都幾川村教育委員会・玉川村教育委員会（現ときがわ町教育委員会）によって遺跡分布調査が行われ、49遺跡の分布が確認された。第2期は、昭和61年を中心におおよそその前後1年のなかで両村教育委員会（現ときがわ町教育委員会）によって遺跡分布調査が行われており、遺跡は44箇所が確認され総数は93遺跡となった。その後、ときがわ町教育委員会による追加や変更増補があり、現在110遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。

3　遺跡周辺の歴史的環境

旧石器時代

篠新田遺跡から黒曜石製のナイフ形石器（刃部側上半部分と思われる）の1点が出土しているのみである。嵐山町行司免遺跡においても後世の遺構覆土からの出土ではあるがナイフ形石器やポイント、不定形石器などの遺物が発見されていることから、今後この地域でこの時代の遺跡の発見が増加する可能性が高いと考えられる。

縄文時代

遺跡数が最も多く、東側の台地や低地に縄文時代早期から後晩期にかけて多くの遺跡が分布するようになる。

早期：都幾川右岸では日野原遺跡、都幾川左岸では地家遺跡から、撚糸文系、押型文系、沈線文系土器が出土している。

前期：日野原遺跡、地家遺跡、長久保遺跡などで関山式、黒浜式、諸磯式土器の出土事例があるほか、雀川左岸の丘陵上に位置する寒風遺跡などで諸磯c式の土器が出土している。

中期：都幾川右岸の伊勢の台遺跡をはじめとする多数の遺跡で、加曽利E式期の遺構・遺物が検出されている。町内ではこの時期の遺跡が最も多い。

後期：狐塚遺跡から遺構外ではあるが堀之内式期の土器が出土している。ほかにも原遺跡から称名寺式期、日野原遺跡からは称名寺式、堀之内式、加曽利B式期の出土事例がある。

晩期：都幾川中流右岸の市の川遺跡のみである。昭和50年の採石工事で安行3式期の土器が出土している。平成27年度に実施した保存目的の範囲内容確認調査でも石製品とともに安行3式期の土器が出土している。

弥生時代

現在、町内で確認されているのは破岩遺跡のみである。愛宕山の東側を蛇行して流れる都幾川の舌状台地上に、中期後半に比定される弥生土器が２点確認されている。弥生時代後期に比企丘陵とその周辺において、岩鼻式土器と吉ヶ谷式土器という二つの土器文化が共存しながら展開するが、その前段階からこの地域では生活が営まれていたと考えられる。

古墳時代

古墳は一基も認められないが、中期の遺構が１例のみ確認されている。岩殿丘陵北西端に位置する衆生ヶ谷戸遺跡において、和泉式の壺と甕が発見されている。

奈良・平安時代

６世紀初頃から10世紀前半にかけて武蔵国の４大窯跡群の一つである南比企窯跡群が生産遺跡として岩殿丘陵（南比企丘陵）において展開する。ここで生産された須恵器や瓦がいわゆる南比企産として南関東に広く流通するが、町内では原遺跡、狐塚遺跡、伊勢の台遺跡などで須恵器が出土している。また、南比企窯跡群の将軍沢第６支群にあたる日野原遺跡１号窯跡と、同第７支群にあたる県指定史跡亀の原窯跡群が岩殿丘陵北西端に所在する。亀の原窯跡群は瓦陶兼業窯として９世紀代に操業し始め、南比企窯跡群のなかでも後期の窯跡群として知られる。ここでは立正大学考古学研究室及び玉川村教育委員会（現ときがわ町教育委員会）により調査が行われており、Ａ地点に２基、Ｂ地点に７基の窖窯が確認されている。亀の原窯跡群が位置する丘陵斜面を登り切ると頂部には比較的平坦地が広がっている。ここには瓦陶兼業生産に携わっていた工人工房集落が確認された。この遺跡が篠新田遺跡であり、その立地は亀の原窯跡群と将軍沢第６支群の双方に関与する中間地点を占める。現在、竪穴建物跡15軒、掘立柱建物跡６棟が検出され、概ね竪穴建物跡２～３軒に１棟の掘立柱建物跡がセットとなる構成をとることが遺構分布から窺える。竪穴建物跡からは大量の須恵器、瓦を中心とする遺物が出土し、床面にはロクロピットが敷設されるものも検出された。また猿投産のK14号窯期の灰釉碗、K90号窯期の灰釉長頸瓶が出土している。

仏教関連遺跡としては、堂林遺跡が都幾川右岸で大福寺境内遺跡より南 1.2 kmに所在する。この遺跡では調査は行われていないが、戦前玉川尋常高等小学校（旧玉川村立玉川小学校）で教頭として教鞭をとられていた郷土史家小鷹健吾氏も紹介しており、古くから古代瓦の散布地として知られていた。かつて玉川小学校の郷土資料として保管されていた資料には、この遺跡採集の古代瓦があり、その中には武蔵国分寺所用瓦のうち、平城宮系とされる均整唐草文軒平瓦と類似する同文資料が存在する。この資料は８世紀後半～９世紀前葉に否定される。愛宕山南面の山腹には旧医光寺跡が所在する。埼玉県立歴史資料館（現埼玉県立嵐山史跡の博物館）とときがわ町教育委員会により調査が実施され、所在する５段の平場のうち最上段の平場で礎石建物１棟と敷石遺構などが検出された。年代は９世紀

中葉から 10 世紀前葉で、出土した須恵器には南比企産と末野産が混在する。また僅かに出土する瓦小破片からは、南比企窯跡群からの供給を伺わせ、軒丸瓦が亀の原窯跡群に見られるものと同様の素弁系で、丸瓦もナデのある薄造りのもので南比企窯跡群北側支群からの供給であると考えられる（石川 2015）。

中世（鎌倉・室町時代）

町の中央北側にそびえる標高 463 メートルの都幾山の南面中腹に広がる旧慈光寺跡、町の北東端には戦国時代の山城として知られる小倉城跡が所在する。

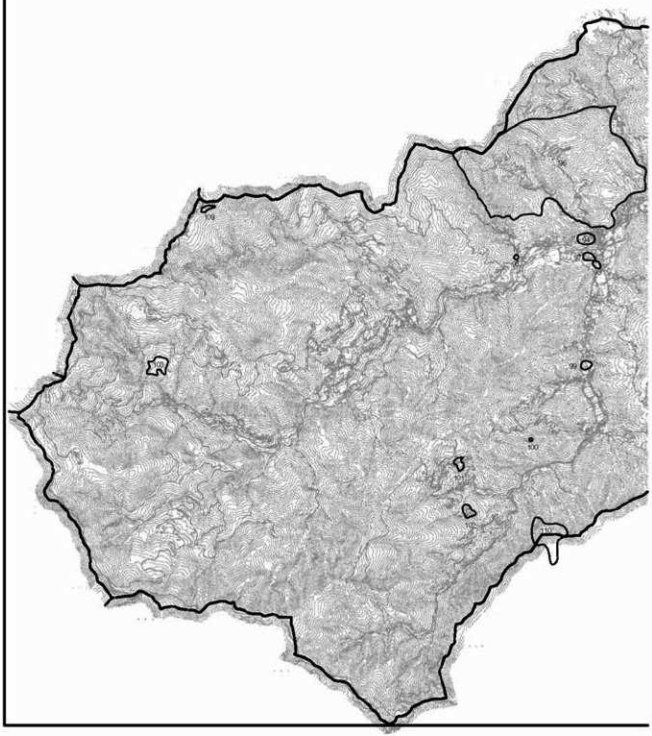
旧慈光寺跡は埋蔵文化財包蔵地として約 150ｈａの面積が登録されている。遺跡内には現在計 126 箇所の僧坊跡が確認されているほか、それら僧坊跡を結ぶ古道や七井として伝わる井戸跡などが所在する。遺跡のほぼ中心部分に位置する慈光寺は現在も法灯を伝える埼玉県内で最古といわれる天台宗の寺院である。寺歴をひもとくと、興福寺の僧慈訓が千手観音像を安置したことにはじまり、ついで、白鳳期には役行者が修験の道場とされている。そして奈良時代に、鑑真和上を師とする道忠禅師によって寺は開山されたと言われている。平安時代には、比叡山延暦寺の別院として「天台別院一乗法華院」とも称された。以降、鎌倉時代には七十五もの僧坊を有する一大山岳寺院として隆盛を誇る。慈光寺と将軍頼朝とのつながりを示す唯一の資料として、鎌倉幕府によって編纂された『吾妻鏡』がある。特に建久３年の記録では、後白河法皇の仏事に伴う百僧供養に際し、頼朝ゆかりの社寺から多数の僧が派遣される中で慈光寺では 10 人もの僧を派遣おり、この寺が重視されていたことがわかる。

発掘調査歴としては過去に数地点において発掘調査が実施されている。平成４年度に№78 地点、平成７年度に№79 地点、平成９年度に№76 地点、平成 20 年度に伝和田の井地点、平成 22 年度に№41 地点、平成 24 年度に№63 地点、№126 地点がそれぞれ調査されている。

小倉城跡は、舌状に突出した丘陵の尾根を占地し、その裾を取り囲むように蛇行する槻川が流れる地形環境にある。更に川を挟んだ向かい側には大平山などの山があって自然地形を、堀や障壁として取込み、天然の要害として利用している。今のところ同時代の文献史料は確認されておらず城主は不明であるが、江戸時代に編纂された「新編武蔵風土記稿」では小田原北条氏の重臣である遠山氏、「武蔵志」では遠山氏あるいは上田氏とも伝えている。構造的には、地形を巧みに利用した５つの郭を造成しており、郭に伴って土塁や堀、切岸、虎口といった防御施設が設けられている。そして、随所に在地の結晶片岩を利用した石積み遺構が見られる。

発掘調査は郭１を平成 15 年から平成 17 年にかけて行われている。南にめぐる土塁内側で石積みが確認されたほか、中央やや南側で岩盤をくり抜いた柱穴が多く確認された。４軒分の建物跡が想定されている。柱穴は直径１ｍ前後の大型のもの、50ｃｍ前後の中型のもの、10～20ｃｍの小型のものがあり、概して大振りのものが多い。中国明代の染付の碗皿、白磁の碗皿、国内の常滑焼の甕、瀬戸焼の碗皿、擂鉢、徳利、カワラケ等の 16 世紀前半から第３四半期に比定される遺物が出土している。

ときがわ町遺跡



第２図　ときがわ町遺跡分布地図

第１表　ときがわ町遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地(大字以下)	時代
1	奥生ヶ谷戸遺跡	大字玉川字奥生ヶ谷戸	縄文中期，古墳，平安
2	後久保遺跡	大字玉川字後久保	縄文中期
3	№3 遺跡	大字玉川字根際	平安
4	玉川小学校裏遺跡	大字玉川字根際	縄文
5	根際遺跡	大字玉川字根際	縄文中期
6	中野原遺跡	大字玉明字中野原	縄文前期・中期，古墳，奈良，平安
7	岩魚遺跡	大字玉明字田中	縄文中期
8	栗ヶ谷戸№1 遺跡	大字玉明字栗ヶ谷戸	縄文中期，古墳，奈良，平安，南北朝，室町，戦国
9	穴田遺跡	大字玉明字栗ヶ谷戸	縄文中期，古墳
10	栗ヶ谷戸№3 遺跡	大字玉明字栗ヶ谷戸	縄文中期，古墳，奈良，平安，南北朝，室町，戦国
11	玉川陣屋跡	大字玉川字舊宿	縄文，平安～江戸
12	中野遺跡	大字玉明字中野	縄文前期・中期，平安
13	高谷遺跡	大字目影字高谷	縄文前期
14	小山遺跡	大字玉明字中野原	縄文早期・中期
15	地家遺跡	大字玉川字地家	縄文中期，鎌倉，南北朝，室町
16	明王院舊遺跡	大字出雲字菩提	縄文中期
17	亀の原窯跡	大字玉川字亀ノ原	平安
18	藤新田遺跡	大字玉川字藤新田	平安
19	伊勢の台遺跡	大字玉川字伊勢の台	縄文中期，平安
20	原遺跡	大字玉川字原	縄文中期，平安
21	奥生ヶ谷戸遺跡	大字玉川字奥生ヶ谷戸	縄文中期，古墳，平安
22	小倉城跡(国指定史跡)	大字出雲字江戸田，城山	戦国
23	地家前遺跡	大字玉川字地家前	縄文，鎌倉，南北朝，室町，戦国
24	通称平のクラジロ群落		天然記念物
25	目野原遺跡	大字玉川字目野原	縄文前期，奈良，平安
26	前田遺跡	大字出雲字前田	平安
27	坪ノ内遺跡	大字玉川字坪ノ内	縄文，平安，室町，戦国
28	唐沢遺跡	大字玉川字唐沢	縄文中期
29	狐塚遺跡	大字玉川字狐塚	縄文中期，平安
30	小倉遺跡	大字出雲字小倉	縄文前期，平安，室町，戦国
31	和田遺跡	大字玉川字和田	平安
32	地家遺跡№2	大字玉川字地家	縄文中期
33	春日神社前遺跡	大字玉明字平	縄文中期，鎌倉，南北朝，室町
34	比良遺跡	大字玉明字比良	縄文早期
35	二本松遺跡	大字玉明字二本松	奈良，平安
36	仲井窯群	大字玉川字向山，二本松	江戸(不詳)
37	向山遺跡	大字玉川字向山	縄文
38	薬師堂遺跡	大字玉川字奥生ヶ谷戸	奈良，平安
39	仲井遺跡	大字玉川字向原	縄文中期
40	向原遺跡	大字玉川字向原	平安，鎌倉
41	一ト市遺跡	大字玉川字一ト市	縄文中期，奈良，平安
42	西山遺跡	大字玉明字西山	縄文早期
43	檜沢遺跡	大字玉川字檜沢高田	縄文早期・前期
44	大平遺跡	大字玉明字大平	縄文
45	物見山遺跡	大字玉明字物見山	戦国
46	谷遺跡	大字目影字谷	縄文
47	玉明城遺跡	大字玉明字玉明城	鎌倉，南北朝，室町，戦国，江戸
48	山王山遺跡	大字出雲字山王山	縄文，平安，戦国
49	塙ヶ谷戸遺跡№1 遺跡	大字出雲字塙ヶ谷戸	平安
50	塙ヶ谷戸遺跡№2 遺跡	大字出雲字塙ヶ谷戸	奈良，平安
51	陣場山舊遺跡	大字出雲字陣場山	縄文前期
52	安林遺跡	大字出雲字菩提	縄文中期，奈良，平安
53	荒田遺跡	大字玉川字荒田	奈良，平安
54	坪ノ内№2 遺跡	大字玉川字坪ノ内	縄文
55	和田№2 遺跡	大字玉川字和田	縄文，奈良，平安

番号	遺跡名	所在地(大字以下)	時代
56	亀ノ原№2 遺跡	大字玉川字亀ノ原	縄文中期
57	五反田遺跡	大字玉川字五反田	奈良、平安
58	和田前遺跡	大字玉川字和田前	縄文中期
59	磯岩遺跡	大字玉川字磯岩	弥生中期、奈良、平安、鎌倉、南北朝
60	坂上遺跡	大字玉川字坂上	縄文中期
61	小市遺跡	大字玉川字小市	縄文前期
62	田向遺跡	大字目影字田向	縄文、奈良、平安
63	小北遺跡	大字目影字小北	鎌倉、南北朝、室町、戦国
64	平松下中道遺跡	大字玉川字平松下中道	縄文中期
65	北山遺跡	大字玉川字北山	縄文前期
66	向山遺跡№2	大字玉川字向山	縄文中期、平安
67	栗ヶ谷戸№4 遺跡	大字玉川字栗ヶ谷戸	鎌倉、南北朝、室町
68	檜沢東遺跡	大字玉川字檜沢	縄文前期
69	小松遺跡	大字玉川字小松	縄文早期・前期
70	笹山遺跡	大字玉川字笹山	縄文早期・前期
71	寒風遺跡	大字玉川字寒風	縄文
72	長久保遺跡	大字目影字長久保	縄文早期・前期、平安
73	八部沢遺跡	大字玉川字八部沢	縄文早期
74	向山北遺跡	大字玉川字向山	縄文
75	大福寺窪内遺跡	大字田黒字小倉	縄文、平安
76	大福寺東遺跡	大字田黒字小倉	縄文前期・中期、鎌倉、南北朝、室町、戦国
77	屋ノ内館跡	大字玉川字熊家前	縄文、戦国
78	螺向遺跡	大字田中字螺向	縄文中期
79	八幡遺跡	大字桃木字神戸、大門	縄文早期～後期、室町
80	美桜遺跡	大字関堀字美桜	縄文中期
81	愛宕山遺跡	大字関堀字熊山	縄文中期、平安
82	愛宕山下遺跡	大字関堀字中ノ川	縄文、平安
83	江光山遺跡	大字桑匠字江光	縄文早期～後期
84	台遺跡	大字桑匠字台	縄文前期・中期、平安
85	門林遺跡	大字桑匠字門林	縄文前期
86	原遺跡	大字桑匠字原	縄文中期
87	川久保遺跡	大字桑匠字川久保	縄文中期
88	沢口遺跡	大字本郷字沢口	縄文中期
89	白粉山遺跡	大字本郷字殿ヶ谷戸	縄文中期
90	白粉山下遺跡	大字本郷字殿ヶ谷戸	縄文中期、平安
91	於板遺跡	大字宗匠字於板	縄文後期
92	女恵岩遺跡	大字西平字女恵岩	縄文中期
93	中瀬戸遺跡	大字瀬戸元十字江地谷戸	縄文前期
94	平宿遺跡	大字西平字宿	縄文中期・後期
95	曲玉遺跡	大字西平字曲玉谷	縄文
96	旧慈光寺跡 (双葉定重要遺跡)	大字西平字竹ノ平、石打場、後野、都塊山、西谷、麻畝、丸尻岩、慈光坂、鎧入	平安～江戸
97	中尾原遺跡	大字西平字中尾原	縄文中期・後期
98	八幡平遺跡	大字西平字中尾原	縄文中期・後期
99	夏内遺跡	大字西平字夏内	縄文中期
100	多武峰瓦塔遺跡	大字西平字多武峰	平安～室町
101	目向根遺跡	大字們平字目向根	縄文後期
102	栄樋遺跡	大字們平字栄樋	縄文早期・後期
103	橋倉城	大字大野字橋倉	戦国
104	タラヨウジュ		天然記念物
105	カヤ		天然記念物
106	三城ヒカリゴケ自生地		天然記念物
107	市の川遺跡	大字田中字市川	縄文後期・晩期
108	旧医光寺跡	大字桑匠字峰山	縄文前期、平安
109	堂平山遺跡	大字大野字七重	平安、南北朝、室町、戦国
110	大築城跡	大字西平字大築、大字們平字大作久	戦国

Ⅲ　遺跡の概要

大福寺境内遺跡は、埼玉県比企郡ときがわ町大字田黒字小倉 608 外に所在し、国指定史跡小倉城跡の東山麓に位置する。当該地は、ときがわ町、嵐山町、小川町の境界付近にあって、地形的にも外秩父山地と関東平野の境界に位置する。遺跡周辺は、槻川の蛇行により形成された、谷、山地、段丘面が隘路により閉ざされた空間として存在し、自然地形を活かした天険の要害に立地する。この遺跡背後の小倉城跡は、標高 137mをピークとする郭１とやや低い郭２を頂部に配置し、以下梯郭式に郭を形成する。当遺跡の位置する大福寺は研究者により山麓の根古屋とみられている注目の場所で、その前面には大きく食い違い状に溝掘の跡らしき南北に細長い区画として水田跡が現在も確認できる。現況では大福寺は山裾を切土して造成した平場地形にあり、以下東へ雛壇状に畑地が造成されながら比高を下げて段丘面、槻川河床へと至っている。

大福寺境内遺跡は、旧玉川村立玉川小学校に保管されていた、大福寺境内で採集された中世瓦が注目される。いわゆる比企型剣頭文軒平瓦で武蔵府中の大國魂神社（旧武蔵総社六所宮）出土資料と同范であり 13 世紀末～14 世紀初頭に比定されている。都幾川流域と中世国府域との関連を窺わせる極めて貴重な事例である。境内地周辺の中世石造物は板碑や五輪塔、宝篋印塔の存在が確認できる。板碑は、亡失も含め 15 基が確認されており、紀年銘の解るものは６基、年代幅は弘安３年～応永 21 年（1280～1414）で戦国期のものは確認されていない。五輪塔、宝篋印塔は、境内地及びその北に隣接する墓地に残欠が散在する。江戸時代には関係する文書が残らないが『新編武蔵風土記稿』では同寺について①慶安２年（1649）に熊野権現社領として朱印地５石６斗が安堵されていること、②下青鳥村浄光寺の末寺で開山は賢仙、寂年を伝えずとされている。①については、背後に所在する小倉城跡の東面の最も下に位置する腰郭群あたりを「くまのさま」と地元で呼んでおり、石組の祠が現存している。先の比企型中世瓦が神社系の瓦である点は符合する点であり注目する必要がある。②については同書編さん段階ではすでに記録が失われていたのであろうか。あるいは、周辺に残る遺物等を勘案すると、逆に開山が中世段階まで遡るためとも考えられる。現地に残された、住職墓の紀年を確認すると、明和５年（1768）、寛政５年（1793）、天保 14 年（1843）、明治２年（1869）で 18 世紀後半～19 世紀後半にまとまり、風土記稿編さん段階で住職が止住していたことが確認できる。ちなみに僧侶名には「阿闍梨」「法印」がつき天台密教的な系譜を伝えたものであろうか。（ときがわ町埋蔵文化財調査報告第６集『町内遺跡Ⅴ』より転載）

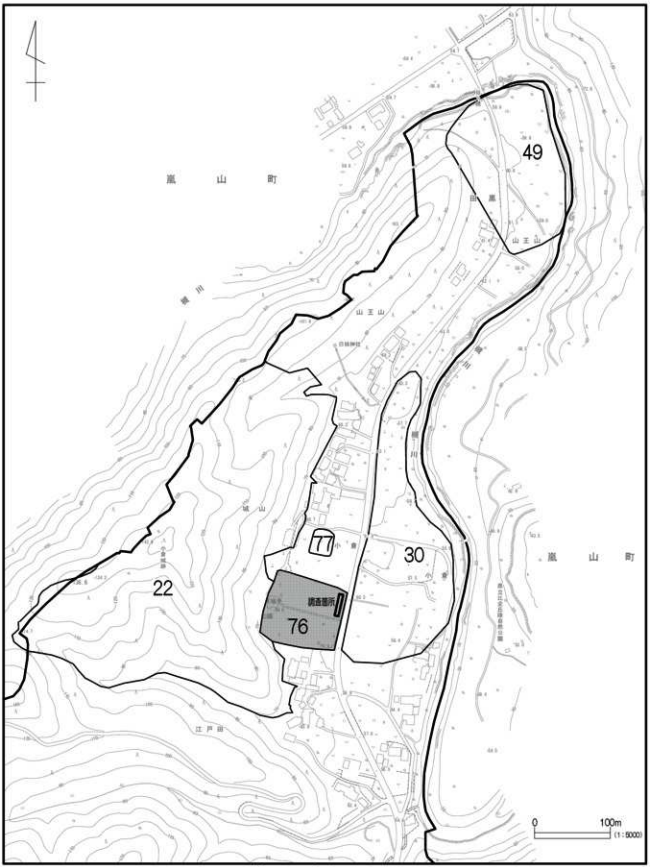
既往の調査としては、過去３次にわたって調査が実施されている。第１次調査は平成 22 年４月に実施された。国指定史跡小倉城跡の臨時駐車場設置の準備に伴う保存目的の範囲内容確認調査であり、これが当遺跡の発見の契機となった。遺構としては上層に近世段階の石積み遺構、石敷き遺構、下層に中世段階の遺構面の存在が確認された。石積み遺構はその検出状況から寺の正面法面の化粧遺構であると推測される。遺物としては、内耳鍋などの中世在地土器や常滑甕、瀬戸美濃擂鉢、中世瓦とい

った中世遺物が出土しているほか、近世陶磁器の破片資料が出土している。

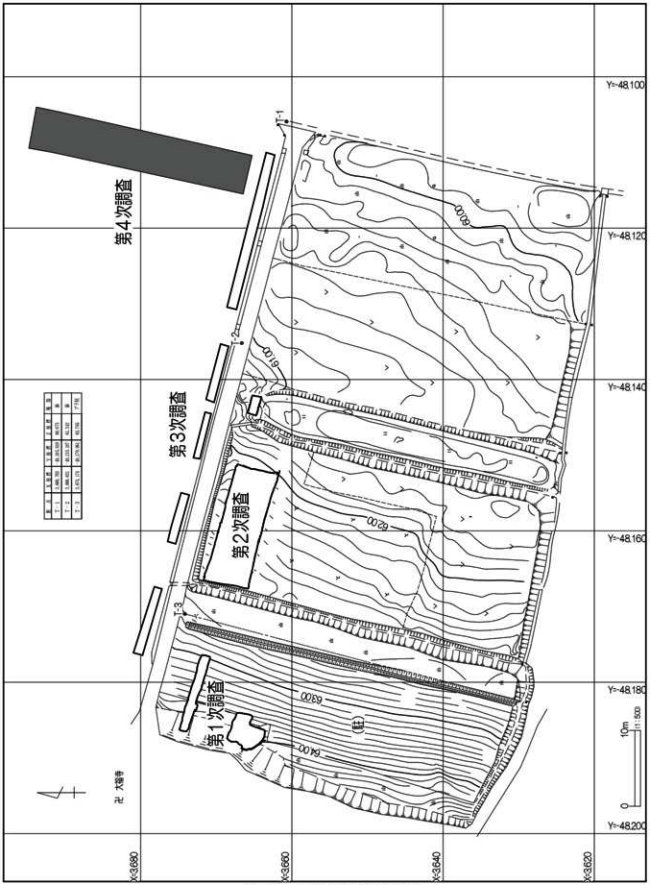
第２次調査は、平成 26 年４月に国指定史跡小倉城跡の駐車場・トイレ候補地を探るための保存目的の範囲内用確認調査として実施された。遺構としては、古代の竪穴建物跡がプランは不明ながら埋没している可能性が高いことが指摘されており、また、中世以降の集石遺構が確認されている。遺物は、10 世紀初頭前後の末野産の須恵器、須恵器系土師質土器が町内で初めて確認されているほか、風字硯や猿投産のK-90 窯期の灰釉陶器長頸瓶、段皿片が出土しやや特殊な出土傾向にある。また、中世の遺物としてはカワラケや中世在地土器、瀬戸美濃産の大窯期の匣鉢、大窯３期の天目茶碗などが出土している。

第３次調査は、平成 29 年１月に地元要望の道路拡幅を踏まえた保存目的の範囲内容確認調査として実施された。遺構としては大福寺参道北側の第１号トレンチから２条の石列で構築された石組み側溝が検出された。時期は共伴する遺物から中世段階と考えられる。現在の限られた情報の中では大福寺の旧参道に伴うものと想定している。遺物としては、中世在地土器の小片が出土遺物のほとんどを占めるなかで、カワラケや陶磁器といった中世遺物のほかに一定量の古代と近代の遺物もみられた。

第４次調査は本報告による。



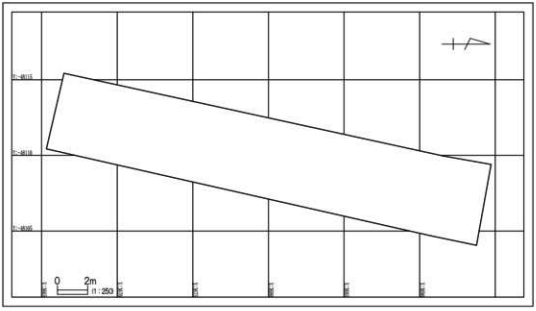
第３図　遺跡周辺の地形


第4次調査
第3次調査
第2次調査
第1次調査
Y=-48,100
Y=-48,120
Y=-48,140
Y=-48,160
Y=-48,180
Y=-48,200
X=3,680
X=3,660
X=3,640
X=3,620
10m
1:500
0
6100
6200
6300
6400
6500
1-1
1-2
1-3
1-4
1-5
1-6
1-7
1-8
1-9
1-10
1-11
1-12
1-13
1-14
1-15
1-16
1-17
1-18
1-19
1-20
1-21
1-22
1-23
1-24
1-25
1-26
1-27
1-28
1-29
1-30
1-31
1-32
1-33
1-34
1-35
1-36
1-37
1-38
1-39
1-40

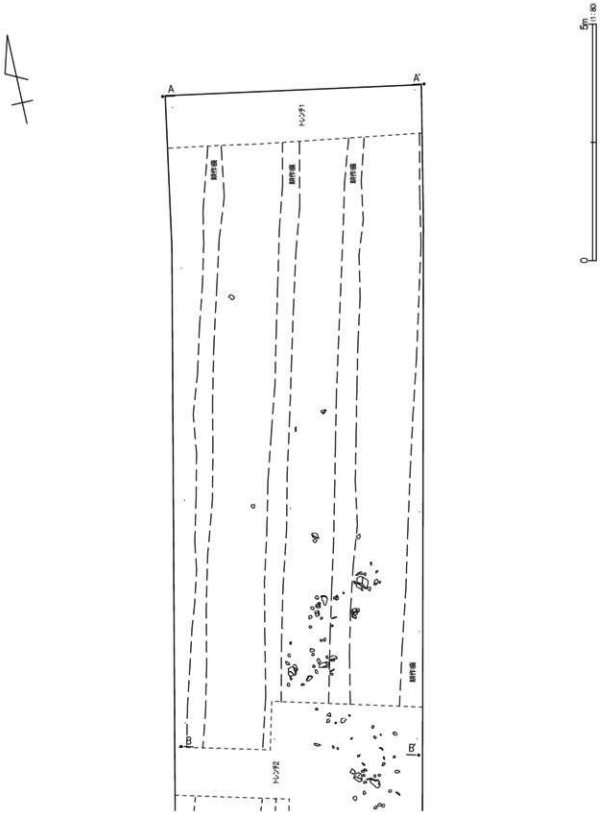
Ⅳ　調査の方法と成果

１　調査の概要

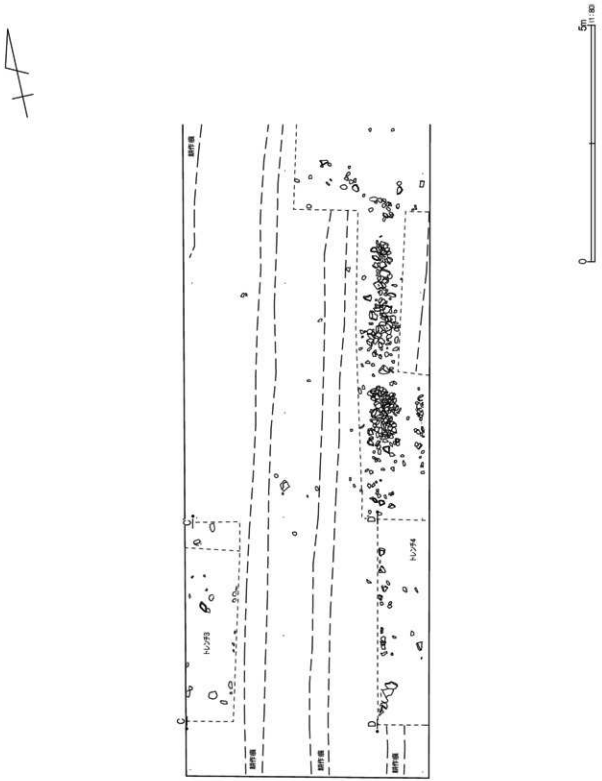
平成３０年度の第３次調査時にときがわ町大字田黒５９９－１おいて中世の石組側溝が検出された。今回の第４次調査は大福寺境内遺跡の内容確認と併せて、その石組側溝のさらなる情報を求めて実施した。石組側溝を検出した同筆内において調査区を設定した。調査範囲は東西５ｍ、南北 29ｍで面積 152 ㎡である。調査方法としては、重機（小型バックホウ）で表土除去作業を実施し、表土除去後は人力で掘削し遺構確認を行った。遺構測量はラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施した。対空標識の観測及び出土遺物の三次元測量はトータルステーションを使用した。測量に使用した基準点は第２次調査（平成 26 年）時に設置したものである。記録写真撮影は、デジタル一眼レフを使用した。遺跡の層序は現地表面から遺構確認面までが 30cm であった。表土約 10cm が耕作土であり、それより下が自然堆積土で極めて硬い土であった。



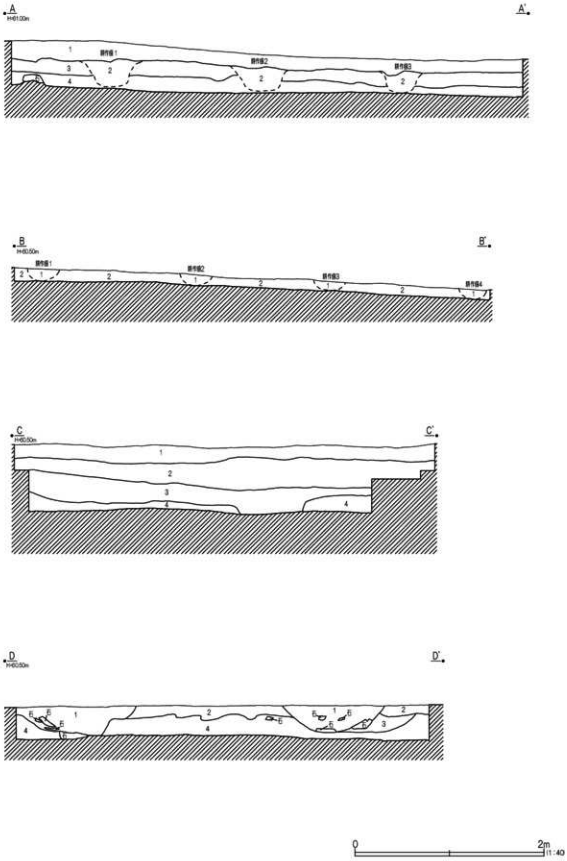
第５図　調査区全体図



第６図　調査区平面図（１）



第７図　調査区平面図（２）



第８図　土層断面図

第２表　第１号トレンチ土層観察表

層位	色調	粘性	しまり	含有物･その他
1	表土(上 10cm 程度耕作土)			
2	暗褐色土	強	極強	
3	明褐色土	強	極強	小砂利を多く含む。
4	暗褐色土	強	極強	

第３表　第２号トレンチ土層観察表

層位	色調	粘性	しまり	含有物･その他
1	暗褐色土	強	極強	
2	明褐色土	強	極強	小砂利を多く含む。

第４表　第３号トレンチ土層観察表

層位	色調	粘性	しまり	含有物･その他
1	耕作土			
2	明褐色土	強	極強	小砂利を多く含む。
3	暗褐色土	強	極強	小砂利を多く含む。
4	明褐色土	強	極強	

第５表　第４号トレンチ土層観察表

層位	色調	粘性	しまり	含有物･その他
1	暗褐色土	強	極強	小砂利を多く含む。
2	暗褐色土	強	極強	小砂利を含む。
3	暗褐色土	強	極強	
4	明褐色土	強	極強	

2　遺構と遺物

本調査区は町道玉 1-6 号線に沿って東西 5.4m×南北 28.8mで約１５２㎡を重機により表土を掘削し、以下人力にて掘り下げ精査した。結果、近現代のものと思われる比較的新しい耕作痕が南北方向４条確認されたほか、調査区西側において集石遺構が検出された。遺構の時期については、出土遺物から中世以降と考えられる。なお、耕作痕の幅は約 30cm を計る。

（1） 集石遺構

調査区西側において幅 0.5m、南北約 5.0mに伸びるかたちで集石遺構が検出された。集石遺構は結晶片岩系とチャート系を主とする石材構成である。遺構の南側一部が耕作痕により撹乱されており、また時間的な制約があるなかでの調査であったため、集石遺構の全容については判然としないが、遺構南側はさらに東方向へ調査区外に伸びる様相を呈していた。遺物は、集石遺構に絡れるかたちで中世瓦が出土している。そのため、当該遺構は寺社関連のものと想定でき、プランは不明ながら礎石跡や立柱建物跡などの遺構が埋没している可能性が高い。

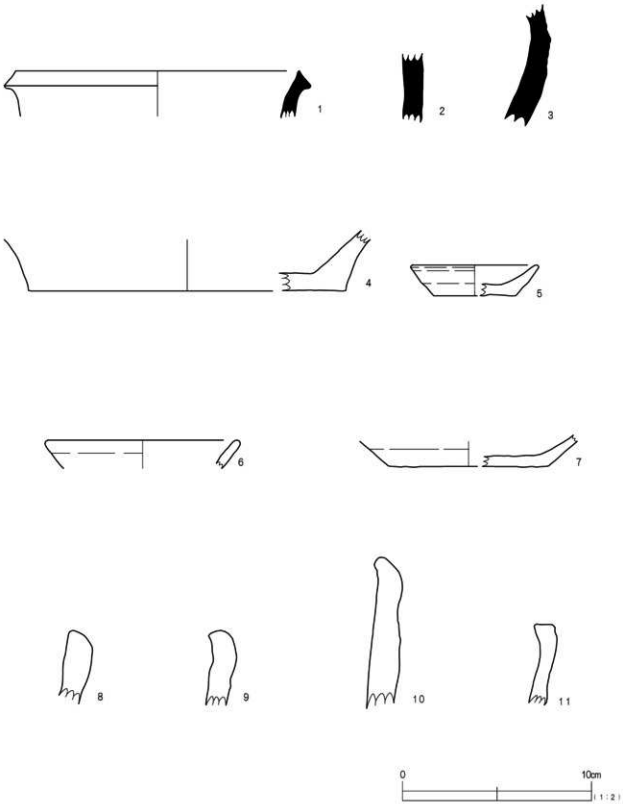
（2）調査区出土遺物

調査区内で出土したもののなかで、図版に耐えうる遺物を選択的にいくつか掲載した。

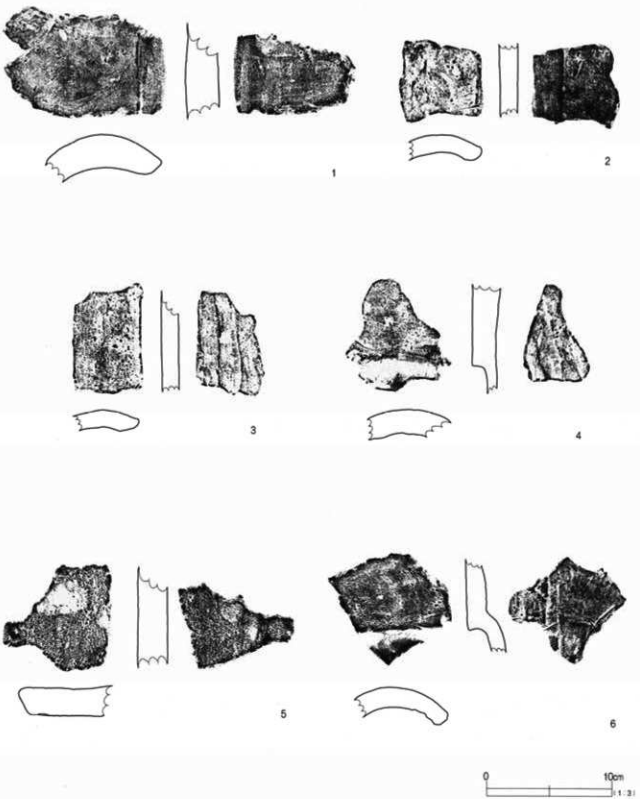
第 10 図１～３は須恵器である。いずれも南比企産であり、胎土に白色針状物質が認められる。１は甕の口縁部片で口径は推定で 15.0cm を測る。２は大甕の胴部片で厚さ 0.9cm を測る。３は大甕の胴部片で厚さ 1.2cm を測る。４は陶器の底部片で、底径は推定で 16.8cm、常滑産である。５～７はカワラケである。５は口縁から底部まで残存する比較的小ぶりなカワラケ片で、口径は推定で 6.8cm、底径は推定で 4.4cm、ロクロ整形である。色調は橙色を呈し、胎土に片岩粒子が認められる。６は口縁部片で口径は推定で 10.0cm、ロクロ整形である。色調は橙色を呈し、胎土に片岩粒子が認められる。７は底部片で底径は推定で 8.2cm ロクロ整形である。色調は薄橙色を呈し、胎土は緻密であるがわずかに砂粒が認められる。８～11 は中世の在地土器である。８は鉢で口径は推定で 21.6cm を測る。色調は灰褐色を呈し、胎土は須恵質である。９は内耳鍋の口縁部片で口径は推定で 16.6cm を測る。10 は内耳鍋の口縁部片である。11 も内耳鍋の口縁部片である。口径は測定するのが困難であった。いずれも色調は橙色を呈し、胎土は緻密であるが角閃石粒子を含む。

第 11 図１～６は中世瓦である。１は丸瓦片で厚さ 2.7cm、色調は橙色で胎土に大小の角閃石粒子が認められる。２は平瓦片で厚さ 1.4cm、色調は橙色で胎土に大小の角閃石粒子が認められる。３は平瓦片で厚さ 1.5cm、色調は橙色で胎土に大小の角閃石粒子が認められる。４は丸瓦片で厚さ 2.0cm、色調は橙色を基本とするが外面に煤による薄墨色を一部残す。胎土は大小の角閃石粒子が認められる。５は平瓦片で厚さ 2.3cm、色調は全体的に煤による薄墨色を呈し、胎土は大小の角閃石粒子が認められる。６は丸瓦片で厚さ 1.6cm、色調は全体的に煤による薄墨色を呈し、胎土は大小の角閃石粒子が認められる。

第９図　調査区遺物出土状況図



第 10 図　調査区出土遺物実測図（1）



第 11 図　調査区出土遺物実測図（2）

第６表　調査区出土遺物観察表

遺物番号	図	番号	遺構	遺物		口径	底径	器高	部位	備考
				種別	器種	(cm)	(cm)	(cm)		
1	10	1	調査区	須恵器	甕	(15.0)	—	—	口縁	南比企産
2	10	4	調査区	陶器	甕	—	(16.8)	[3.2]	底部	常滑産
3	10	8	調査区	在地土器	鉢	(21.6)	—	—	口縁	
4			調査区	灰釉陶器		厚さ0.7cm				
5			調査区	須恵器	甕	厚さ0.9cm				南比企産
6			調査区	須恵器	甕	厚さ0.8cm				
7			調査区	須恵器	甕	厚さ0.6cm				
8	10	2	調査区	須恵器	甕	厚さ0.9cm				
9			調査区	須恵器	坏	(5.4)	—	[1.7]	底部	ロクロ整形
10	10	5	調査区	カワラケ	皿	(6.8)	(4.4)	1.6		ロクロ整形
11	10	6	調査区	カワラケ	皿	(10.0)	—	—	口縁	ロクロ整形
12	10	9	調査区	在地土器	内耳鍋	(16.6)	—	—	口縁	
13	11	1	調査区	瓦	丸瓦	厚さ2.7cm				
14	11	2	調査区	瓦	平瓦	厚さ1.4cm				
15	11	3	調査区	瓦	平瓦	厚さ1.5cm				
16	11	4	調査区	瓦	丸瓦	厚さ2.0cm				
17	10	10	調査区	在地土器	内耳鍋	厚さ1.8cm	—	—	口縁	
18	11	5	調査区	瓦	平瓦	厚さ2.3cm				
19	10	7	調査区	カワラケ	皿	—	(8.2)	[1.6]	底部	ロクロ整形
20	10	3	調査区	須恵器	甕	厚さ1.2cm				南比企産
21	10	11	調査区	在地土器	内耳鍋	厚さ0.8cm			口縁	
22			調査区	須恵器	甕	厚さ1.0cm				南比企産
23	11	6	調査区	瓦	丸瓦	厚さ1.6cm				
24			調査区	カワラケ	皿	厚さ0.5cm				
25			調査区	須恵器	甕	厚さ0.5cm				
26			調査区	カワラケ	皿	厚さ0.5cm				
27			調査区	鉄製品						

Ⅴ　発掘調査の成果

今回発掘調査を実施した大福寺境内遺跡は、史跡小倉城跡東面の麓に所在する大福寺の下段東側広がる畑地を範囲とし、史跡小倉城跡の根小屋が想定されるような立地条件を有する。過去に３次にわたる調査がおこなわれており、第１次調査では境内法面の調査区において下層から中世の在地土器や陶器が出土し、中世段階の遺構面が確認された。第２次調査では大福寺参道南側の畑地で実施された調査区において、出土遺物としては古代の遺物のほかに中世在地土器や瀬戸・美濃産の匣鉢、天目茶碗など中世の遺物も確認されており、遺構としては中世以降の集石が検出され、その下層に古代の竪穴建物跡が埋没している可能性が指摘されている。第３次調査では、出土した遺物は小片で摩耗が激しいものが多かったが、中世の遺物を中心とする過去の調査と矛盾しない遺物内容であった。遺構としては中世段階と考えられる石組側溝を検出している。特徴的な遺構を検出したことは大きな成果といえるが、この遺構がどういう性格なのか等不明な点を多く残すものであった。

本時調査は、この石組側溝の全容解明の一端を担うものとして期待を寄せて実施したものであった。調査区からは南北に伸びる集石遺構が検出され、この遺構に伴うかたちで中世の平瓦及び丸瓦が出土した。出土遺物としては、このほかに中世在地土器やカワラケの細片も散発的に出土した。集石遺構が中世瓦を伴って検出されていることから、この遺構が宗教施設と強く関わっている可能性が高いと考えられる。しかしながら、どのような機能や役割を果たしていたかは本時調査でははっきりさせることができなかった。また、第３次調査において検出された石組側溝との関係については、両者とも中世段階であるという点で時代の大きな枠組みとしては一致していると考えてよいが、それ以外の直接的な関係を示すような情報は得られなかったため、現状では不明であると言わざるを得ない。本時調査でも、集石遺構の検出状況も判然とせず不明な点が多いばかりで大きな成果は得られたとは言えないが、遺構に伴出するかたちで中世瓦が出土したことから、これが大福寺境内遺跡に何らかの宗教施設が存在する可能性が高いという新たな知見を得ることができた。このことを念頭に置いて今後の調査を進めていきたい。また、西側に現在立地する大福寺との関係性も視野に入れておく必要があるだろう。

引用・参考文献

石川安司　1994　「春日神社境内遺跡」『玉川村村史調査報告』第５集　玉川村教育委員会

石川安司　2012　「町内遺跡Ⅴ」『ときがわ町埋蔵文化財調査報告』第６集　ときがわ町教育委員会

石川安司　2015　「町内遺跡Ⅷ」『ときがわ町埋蔵文化財調査報告』第９集　ときがわ町教育委員会

写　真　図　版

図版１

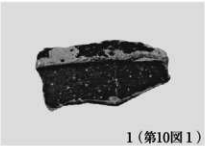
調査区遠景（東から）

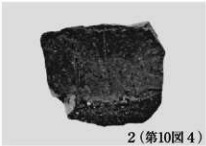
調査区遠景（西から）

図版２

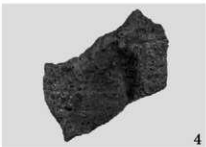
調査区全景

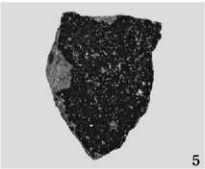
図版３


1（第10図１）


2（第10図４）

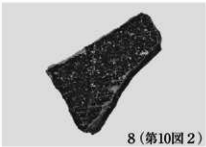
3（第10図８）


4


5

6

7

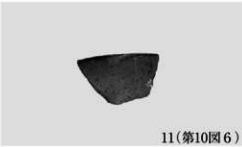

8（第10図２）

9

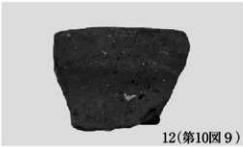
10（第10図５）

調査区出土遺物（１）

図版４



11（第10図６）



12（第10図９）

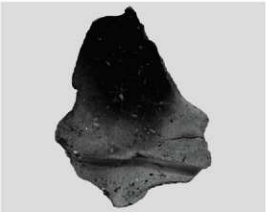
13（第11図１）

14（第11図２）

15（第11図３）

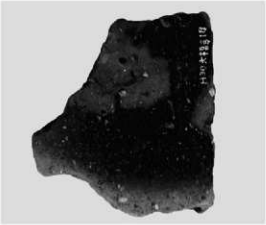
調査区出土遺物（２）

図版５



16（第11図４）

17（第10図10）

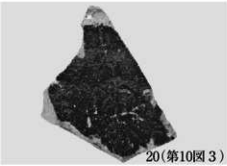


18（第11図５）

調査区出土遺物（３）

図版６

19（第10図７）



20（第10図３）

21（第10図11）

22

23（第11図６）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちょうないいせき
書名	町内遺跡
副書名	大福寺境内遺跡(第４次調査)
巻次	XⅢ
シリーズ名	ときがわ町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第14集
編著者	杉山拓馬
編集機関	ときがわ町教育委員会
所在地	〒355-0396　埼玉県比企郡ときがわ町大字桃木32
発行日	2020 年 3 月 31 日

所収遺跡(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
大福寺境内遺跡(だいふくじけいないいせき)	ときがわ町(ときがわまち) 大字田黒(おおあざたぐろ) 字小倉(あざおぐら)	11349	41-076	36° 01'54.9"	139° 17'56.6"	20181218 ～ 20190110	152.0 ㎡	範囲内容確認調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大福寺境内遺跡	集落跡、中近世寺院、城館跡	縄 文 ・ 平安・中世	集石遺構	須恵器、カワラケ、中世瓦、中世在地土器	**中世の集石遺構を検出**

ときがわ町埋蔵文化財調査報告第 14 集

町内遺跡ＸⅢ
大福寺境内遺跡（第４次調査）
－保存目的の範囲内容確認調査－

２０２０年３月３１日
編集・発行　ときがわ町教育委員会
印　　刷　たつみ印刷株式会社